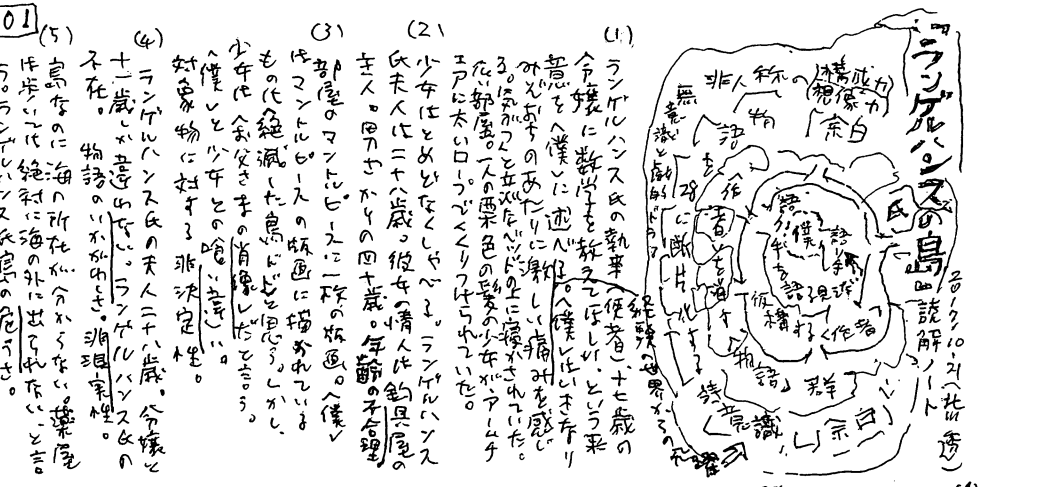

NO1

(1) ランゲルハンス氏の執事(使者)、十七歳の令嬢に数学を教えに通っている。

(2) 少女はとめどなくしゃべる。ランゲルハンス氏夫人に二十八歳。彼女の情人的な副保護の主人。男やかりの四十歳。年齢の不合理。

(3) 部屋のマントルピースに一枚の版画。(僕)はマントルピースに一枚の版画に描かれているもの(絵)。また島ばかりを思う。しかし、少女は会父さまの肖像レリーフ。

(4) ランゲルハンス氏の夫人二十八歳。令嬢と十二歳しか違わない。ランゲルハンス氏の不在。物語のいかがわしさ。

(5) 島なのに海の所在が分からない。薬屋は歩いては絶対に海の外に出てはいけないこと言う。ランゲルハンス氏島の危うさ。

(6) 学校の跡地は魚市場になっている。魚市場で、墓地もない。土が粘質なので、墓穴をほるべきことを布告。南への岬の鼻は五十米の絶壁になっていて、ここから海への滑り台がある。放置されていて、ここから海へ落ちる。時には死体まで流れる。

(7) 島では自動車のまわってない生活のタクシー。メーターがとめられている。運転手とタクシー(運命共同体)で離れられない。もの淋しさ。

(8) 森の木はおおむね伐採だった。その幹には一本おきの傷がついている。薬屋のマダムの言うことと、実際の先じりの立っている木との食い違い。つじつまの合わなさ。

(9) フレンチドアのコーヒー店の階段の下は四十五度傾斜になっている。ここは機械を作る機械を作る機械ですべてマスターされている。着ぶくれした機械の長いベルにかき立てるようなボーイの首に機械がつけられる。チャップリンの「モダンタイムス」(1936年)における機械文明の一部になっている労働者が機械のようになってしまう。薬屋のマダムの言う「差別」されるシーンもある。「モダンタイムス」のパロディとイメージの現代性。

(10) 令嬢に美術館に誘われる。途中で木立の中から白い布をかぶった三人の人間が出てくる。タンバリンを打ち鳴らす。すると家々の戸が開いてそれぞれの服装の女たちが現れる。彼らのくるくるとした中の一人が道具や絵が本物に変容すると言うシュールレアリスム風の幻想的イメージ。

(11) 食事を続けるしかない。夜の十時、閉店後に神仕たちが来て一旦放たれた四百体ぐらいの死体をひきずり込んでテーブルの下に積載して深夜の街に消える。

(12) 次第に場で、墓地もない。土が粘質なので、墓穴をほるべきことを布告。南への岬の鼻は五十米の絶壁になっていて、ここから海への滑り台がある。放置されていて、ここから海へ落ちる。時には死体まで流れる。

(13) 島に一軒しかない書店の主人で中年男。工事をしている。工事は祖父が始めた。書店に本が並べてあるのを防ぐ仕切りがあるが、工事が始まったという。

(14) 医師と僧侶が猟銃をもって山に登りかける。山の裏側の谷で仔牛が狙撃される。二人はそれぞれ性我をしながら、散弾銃で応酬した。警官隊が出動し、谷の奥で撃の相売。新型の銃が立てかけてあるのが発見され、検察官がすんだと断定される。検事により、銃が没収される。荒唐無稽なお話。非現実性。

(15) 画家のアトリエ内のみの円い絵の中にあったが、この塔に潜望鏡のようにのぞみすると、その伸縮自画家の芸術的態度の昂揚と窓枠関係をしていた。画家に会おうとしないことが多かった。

(16) バーで聞いた片目の歌うたいの歌の記録。

(17) 全部で八つのパートから出来ている歌。

(18) どのパートも最初は下手で、歌い終わる。その内容は、二十六人のフレーズから始まる。その歌の内容は、三十六人でかけて三人帰ってきた。悲痛なかぶった笑っていたも人のうち六人は帰ってこなかった。その悲しい旅で起った出来事を歌っている。片目の歌い手は帰ってきた三人の一人。

(19) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(20) 広場の中央には、古い帆前船が安置されているの内部の船室は窮屈に封印されていて見ることはできないが、(僕)が、危っかしい足場の上に腰をかがめてのぞいたら、ドアの向こうに見えたものがある。それはドアの向こうから一匹のねずみが、白い羽を一本くわえて生まれてきたばかりにするとまたドアの向こうに逃げこんだ

(21) 絨緞屋に行くと、一本の絨緞が口を開く。「宮の刺りた絨緞なかしいについた釘びはいかがなものでの。」……その時、扉のドアが開いてマダムのおそろしい出現。

(22) 軽妙なウイットのおかしさ。

(23) 丘の東側で大きな土木工事。十年ほど前から始まったこの工事の目的については分からない。島の海岸沈下の日に備えて何十階かのビルを建てるための各階に舟着き場を設けるとのうわさ。すごい騒音だが住民からは苦情が出ない。

(24) 観光客向けとでもいうべきか。

(25) 時計台の四つの時計。すべて三時三十五分。

(26) 螺線階段の上の塔の小部屋。流行の婦人靴のあった生。空しさ。

(27) カルキ臭い水道の水と森の岩かげの濡れのカルの匂いの対比。自然信仰の無意味さ。

(28) 半年たったうすのこと、ランゲルハンス氏の帆船が現れたという伝説をめぐった情報。ランゲルハンス氏の夫人(妹)の事件以来、病気を装って床についたもう。彼女の情人の釣具屋のおじさんが来ている。

(29) 沖の帆船から上陸してきたランゲルハンス氏が、夜の闇にまぎれて上陸すると妻とその情人を殺し、海の彼方へ逃れ去った。……ようだ。事件が起こる。当日朝、(僕)に食事の支度をするようにの命じる。しかし、殺伐を見ていた(僕)のみでおそれて、事なき情みがたがっている。作品の終り。

(30) 島の対象に出来ない。小さな島のかじ屋は、今の若い者にローマンチズムを理解しないと慨嘆する。ここらで夜毎の秘密会議の泥は明ける。

(31) 原点だけのテロリズムの立場にある、ロマンチズムに対するアイロニカルな批評の眼がある。

(32) 道路で裸の女が泥まみれで倒れていた。その腰に(僕)の(若い)靴の跡がくっきりとついていた。(僕)はその靴跡もハンケチでぬぐいとっている間に、やめられなくなり、全身の泥もぬぐい落してしまった。その女の前に、この女がまだ生きていることに気づいた。それはランゲルハンス氏の美しい夫人だった。

(33) この島で映画を見にでく人びとは、映画の中の自分を見に行く。映画はすべてにもメンタリーであり、街頭風景でさえ、だれかの撮影技師が、週に一度、街の広場に出てアイモを回す。映画館に観客を動員したいという映画館主の方針で撮影技師は、客の中から私生活の情景をとり入るようになった。それで人々は私生活にカメラの空ぢ入りを喜ぶようになり、映画的入浴シーンが、ベッドシーンばかりになった。そこで当局は撮影技師を映写技師を逮捕、終身禁固を申し渡した。しかしその後も誰が映すのか、全くの謎なのだが、相変らず、きわどいシーンが次々と映されている。(映画館つづく)

(34) ホテルの窓に鍵戸が下りてくる。それを開けるとまた鍵戸が下りてくる。鍵戸の連鎖に閉じこめられている。(関東弁)

(35) カルキ臭い水道の水と森の岩かげの濡れのカルの匂いの対比。自然信仰の無意味さ。

(36) 夏至の夜の広場に焚火が燃え、白い芒洛の花が舞い狂う。伝説をめぐった情報。ランゲルハンス氏の帆船が現れたという。

(37) 半年たったうすのこと、ランゲルハンス氏の帆船が現れたという伝説をめぐった情報。ランゲルハンス氏の夫人(妹)の事件以来、病気を装って床についたもう。彼女の情人の釣具屋のおじさんが来ている。

(38) 沖の帆船から上陸してきたランゲルハンス氏が、夜の闇にまぎれて上陸すると妻とその情人を殺し、海の彼方へ逃れ去った。……ようだ。事件が起こる。当日朝、(僕)に食事の支度をするようにの命じる。しかし、殺伐を見ていた(僕)のみでおそれて、事なき情みがたがっている。作品の終り。

NO2

(一) 眠がさめてみると石ころだけの河原にころがっている。せきばいや黄色い花。

(二) お金もうけのために島に泥棒をはたらいて、河に舟をうかべた。二も包みの中身はだった。

(三) みんな頭の皮をむかれ、河のお花を血が流れた。みんな会父さまと一緒に行ったのかもわからない。

(四) 三人帰ってきたが、それをだれも覚えていない。あの人たちの子供にあちこちにおきた。中には棒状になった連中もあった。(棒状になった人の大きさ)

(五) 河の水の泡れる季節。何もかもがなまめかしくかがやいている。秋から冬が。

(六) アメデオ・ラフトスという人、どこかのお祭りに楽器を担当員としていた若者だが、行方不明。わたしは石にされて倒れていた。

(七) 春に来るか。出ていくかで男たちの死体が発掘される。

(八) 「ランゲルハンス氏の島」という島を失踪した人にかかわる、もう一つの物語が埋められこまれている。物語の二重構造。

(九) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(十) 銀行家をテロの対象に出来ない。小さな島のかじ屋は、今の若い者にローマンチズムを理解しないと慨嘆する。ここらで夜毎の秘密会議の泥は明ける。

(十一) 原点だけのテロリズムの立場にある、ロマンチズムに対するアイロニカルな批評の眼がある。

(十二) 道路で裸の女が泥まみれで倒れていた。その腰に(僕)の(若い)靴の跡がくっきりとついていた。(僕)はその靴跡もハンケチでぬぐいとっている間に、やめられなくなり、全身の泥もぬぐい落してしまった。その女の前に、この女がまだ生きていることに気づいた。それはランゲルハンス氏の美しい夫人だった。

(十三) この島で映画を見にでく人びとは、映画の中の自分を見に行く。映画はすべてにもメンタリーであり、街頭風景でさえ、だれかの撮影技師が、週に一度、街の広場に出てアイモを回す。映画館に観客を動員したいという映画館主の方針で撮影技師は、客の中から私生活の情景をとり入るようになった。それで人々は私生活にカメラの空ぢ入りを喜ぶようになり、映画的入浴シーンが、ベッドシーンばかりになった。そこで当局は撮影技師を映写技師を逮捕、終身禁固を申し渡した。しかしその後も誰が映すのか、全くの謎なのだが、相変らず、きわどいシーンが次々と映されている。(映画館つづく)

(十四) 広場の中央には、古い帆前船が安置されているの内部の船室は窮屈に封印されていて見ることはできないが、(僕)が、危っかしい足場の上に腰をかがめてのぞいたら、ドアの向こうに見えたものがある。それはドアの向こうから一匹のねずみが、白い羽を一本くわえて生まれてきたばかりにするとまたドアの向こうに逃げこんだ

(十五) 絨緞屋に行くと、一本の絨緞が口を開く。「宮の刺りた絨緞なかしいについた釘びはいかがなものでの。」……その時、扉のドアが開いてマダムのおそろしい出現。

(十六) 軽妙なウイットのおかしさ。

(十七) 丘の東側で大きな土木工事。十年ほど前から始まったこの工事の目的については分からない。島の海岸沈下の日に備えて何十階かのビルを建てるための各階に舟着き場を設けるとのうわさ。すごい騒音だが住民からは苦情が出ない。

(十八) 観光客向けとでもいうべきか。

(十九) 時計台の四つの時計。すべて三時三十五分。

(二十) 螺線階段の上の塔の小部屋。流行の婦人靴のあった生。空しさ。

(二十一) カルキ臭い水道の水と森の岩かげの濡れのカルの匂いの対比。自然信仰の無意味さ。

(二十二) 夏至の夜の広場に焚火が燃え、白い芒洛の花が舞い狂う。伝説をめぐった情報。ランゲルハンス氏の帆船が現れたという。

(二十三) 半年たったうすのこと、ランゲルハンス氏の帆船が現れたという伝説をめぐった情報。ランゲルハンス氏の夫人(妹)の事件以来、病気を装って床についたもう。彼女の情人の釣具屋のおじさんが来ている。

(二十四) 沖の帆船から上陸してきたランゲルハンス氏が、夜の闇にまぎれて上陸すると妻とその情人を殺し、海の彼方へ逃れ去った。……ようだ。事件が起こる。当日朝、(僕)に食事の支度をするようにの命じる。しかし、殺伐を見ていた(僕)のみでおそれて、事なき情みがたがっている。作品の終り。

(二十五) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(二十六) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(二十七) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(二十八) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(二十九) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十一) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十二) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十三) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十四) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十五) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十六) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十七) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十八) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(三十九) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十一) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十二) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十三) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十四) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十五) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十六) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十七) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十八) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(四十九) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十一) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十二) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十三) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十四) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十五) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十六) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十七) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十八) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(五十九) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(六十) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(六十一) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(六十二) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(六十三) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(六十四) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(六十五) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(六十六) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(六十七) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮だが、久しい前から、不在である。オニのテロの標的はテロリストの父親銀行家だ。しかし三人番いの二人の人は自分の小遣いを借愛しているために

(六十八) 島には三人のテロリストがいた。八代九十九歳のかじ屋、女との二人は銀行家の長男と二男。彼らは花魚宮殿の廃墟に集まって話し合う。テロの目的は才一に長宮